様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １０ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００００２５

研究課題名（和文）「世界への愛」をめぐる政治哲学的探究

研究課題名（英文）A Political-philosophical　Investigation for the Love of the World

研究代表者
森　一郎（Mori, Ichiro）

東北大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：００２３００６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクト「「世界への愛」をめぐる政治哲学的探究」では、ハイデガーとアーレントの哲学的パースペクティヴに基づき、「人びとととともに‐物たちのもとで‐私は世界に住まう」という 根源的事実を存在論的に解明し、われわれの世界を愛することを学ぶレッスンを積むことを試みてきた。公刊した主な研究成果は、次の通り。森一郎の単著2冊：『ポリスへの愛　アーレントと政治哲学の可能性』、『アーレントと革命の哲学　『革命論』を読む』。森一郎の単独訳書１冊：アーレント『革命論』。森一郎の編著2冊：『近代日本思想選　三木清』、『ハイデガー事典』。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ハイデガーとアーレントとともにみずから哲学する森一郎の「世界への愛」研究プロジェクトは、この3年間、強力に推進され、2冊の単著『ポリスへの愛　アーレントと政治哲学の可能性』（2020年）と『アーレントと革命の哲学　『革命論』を読む』（2022年）の公刊によって多大な成果を達成した。アーレント『革命論』のドイツ語からの単独訳（2022年）は、多くの市民に繙かれている。単独編著『近代日本思想選　三木清』（2021年）と、森が編集委員として参画した『ハイデガー事典』（2021年）も、一般読者に歓迎されている。

研究成果の概要（英文）：In this research project "Political-philosophical Approach to the Love of the World" Prof. Ichiro Mori has studied the primordial fact of living-in-the-world-with-people-alongside-things from the perspectives of Heidegger and Arendt, and thus gained the everyday lessons how to love our world. He has published two research books for these three years: The Love of the Polis: Hannah Arendt and the Possibility of Political Philosophy (2020), Hannah Arendt and the Philosophy of Revolution: Reading Arendt's On Revolution (2022). Moreover, he has published Japanese translation of Arendt's On Revolution (2022) from its German edition; furthermore, he has edited two large books: Kiyoshi Miki: Japanese Modern Thinker Anthology Series (2021), Heidegger Encyclopedia (2021).

研究分野：哲学

キーワード：世界への愛　ハイデガー　アーレント　政治哲学　革命論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の森一郎は、東京女子大学に 21 年間勤務したのち、2014 年 4 月から、東北大学大学院情報科学研究科人間情報哲学分野の教授に就任するとともに、科研費研究「「世界への愛」をめぐる現象学的探究」を開始した。

(2) 森は続いて、2017 年 4 月から科研費研究「「世界への愛」をめぐる存在論的探究」に乗り出し、さらに、2020 年 4 月からは、本科研費研究課題「「世界への愛」をめぐる政治哲学的探究」に着手し、この 3 年間取り組んできた。

(3)「世界への愛」という研究テーマ自体は、森がこの 20 年間たゆまず追究してきたものである。本研究「「世界への愛」をめぐる政治哲学的探究」を、森はこの積年の研究プロジェクトを完成させるという意図のもとに遂行してきた。

２．研究の目的

(1)「世界への愛」というテーマに森が逢着したのは、一つには、ハンナ・アーレントの思考におけるこのキーワードを、マルティン・ハイデガーの「世界内存在の現象学」との密接な関連において独自に解き明かしたい、という意図を抱いてのことであった。

(2) もう一つには、2009 年に東京女子大学の伝統校舎解体という事件に立ち会った経験を経て、2011 年 3 月 11 日に勃発した東日本大震災に見舞われた東北の地で、「世界への愛」をあらためて学び、育むことが重要だと思われたということがあった。

(3) 全体として本研究は、森が 30 年以上にわたって追求してきた「現代日本における哲学の可能性」を、「世界への愛」をめぐる探究に一貫して携わることで現実化し、広く世に問うことを主眼とするものである。

３．研究の方法

(1)「世界への愛」という言葉がアーレントの思想圏に属する以上、本研究課題を遂行するには、彼女の基本的な思考態度を自家薬籠中のものとすることが肝要である。主著『人間の条件』(『活動的生』）で提起されている公／私の区別、労働／制作／行為という「活動的生」の三区分、さらには近代批判としての「世界疎外」論に熟達することが、重要となる。

(2) また、アーレントの思考の背景をなすハイデガーの思索を深く理解することが欠かせない。とくに、『存在と時間』で模範的に示された現象学的存在論の方法理念を駆使することが求められる。ハイデガーの「死」と「終わり」の思索と、アーレントの「誕生」と「始まり」の思考とを重ね合わせることで、「時間と存在」に関する重層的な理解を得ることができる。

(3) さらに、「技術」をめぐるハイデガーの思索を、アーレントの「危機」の思考と結びつけて再解釈することで、現代世界の根本動向に対する哲学的視座を獲得する基盤が得られる。そのさい、古代ギリシアにおける根本経験へ遡っていく「現象学的解体」（ハイデガー）や、「真珠採り」（アーレント）の解釈学が導きとなる。

(4) 森自身は、独自の方法態度として、「原理・始まり（arche)」の原義にかなった意味での「原初論（archaeology)」を提唱しようとしている。これは、アーレントの「出生性」概念に触発された、「新しい始まり」の論理の創出の試みである。その原初論を、優れた意味における「終末論 (eschatology)」と織り合わせる思考は、「世代」という実存現象を浮かび上がらせ、ひいては、存在論の根本問題としての「共‐存在時性」の絡み合いを解明することに役立つ。

(5) アーレント『革命論』では、アメリカ革命とフランス革命という近代の二大革命が批判的に考察されているだけでなく、「自由」「平等」「権力」「暴力」「権威」といった政治哲学の根本諸概念が哲学的に掘り下げられている。のみならず、アメリカ合衆国憲法を例にとって哲学的憲法論が展開されている。この書を拠り所として、現代日本で求められている「憲法の哲学」を構築することができる、と森は確信し、この課題に本研究では取り組んできた。

(6) 森が体得してきた哲学的方法態度に、「日々是哲学」がある。存在論や政治哲学の根本問題に挑み、哲学書を徹底的に読み込むことで得られた知見を携えて、日常的で卑近な出来事の現場に赴き、かつ、その生活実践での具体的経験をもとにして哲学的問題を新しい光を当てる、という思索の往還のスタイルである。2020 年に森が参加した宮城県美術館現地存続運動は、この「日々是哲学」の態度を研ぎ澄ます舞台となった。

４．研究成果

(1) 2014 年度に仙台での活動を開始した森は、2015 年、研究仲間とともに「東北アーレント研究

会」（愛称「ハンナ・アーベント」）を設立した。以来、開催は 11 回を数え、問題意識あふれる発表と密度の濃い議論を毎回行なってきている。コロナ禍のさ中には活動休止を余儀なくされたが、2023 年 2 月、復活記念シンポジウム「アーレントと評議会制の問題」を開き、主に佐藤和夫著『〈政治〉のこれからとアーレント――分断を克服する「話し合い」の可能性』（花伝社、2022 年 9 月）をめぐって、提題者の佐藤和夫、コメンテーターの小石川和永と森、司会の田端健人を登壇者として活発な議論を行なった。

(2) まず、本研究の初年にあたる 2020 年度は、コロナ禍に見舞われた年ではあったが、2020 年 3 月に単著『核時代のテクノロジー論――ハイデガー『技術とは何だろうか』を読み直す』を出版したのに続いて、2020 年 11 月、この年二冊目の単著『ポリスへの愛――アーレントと政治哲学の可能性』を風行社から出版した。いずれも、本研究課題に掲げている「世界への愛」プロジェクトの一環をなす積年の研究成果であり、まさに現代における政治哲学の可能性を追究したものである。『ポリスへの愛』は、アーレントの思考を導きの糸としつつ古今東西の思想的遺産を再発見する「真珠採りの解釈学」を駆使してみせた独創的業績である。

(3) 2021 年 3 月には、編著『近代日本思想選 三木清』をちくま学芸文庫として刊行した。西田幾多郎、九鬼周造らと並んで近代日本を代表する哲学者、三木清の哲学の全貌を伝えるアンソロジーを個人編集し、編者による解説と年譜を付した。哲学と政治の間を生き抜いた哲学者の活動的生を現代に甦らせることは、現代日本における政治哲学の可能性をひらくことに資する。

(4) さらに、2020 年度の論文としては、2020 年 6 月刊の『理想』704 号に「死んだら終わりか？」を、2020 年 11 月刊の『ひらく④』に「コロナ禍はどこまで危機なのか――反時代的試論」を、2021 年 2 月刊の『理想』705 号に「学問と生――ニーチェに学んで戦いを生きる」を、それぞれ掲載した。

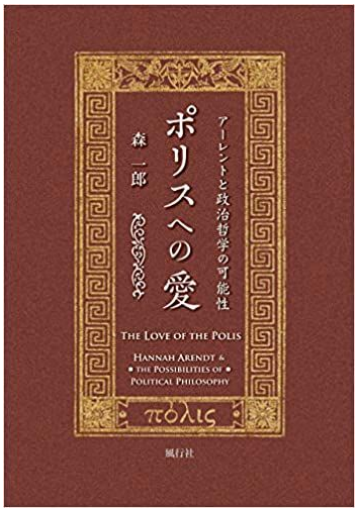
(5) 本研究の二年目にあたる 2021 年度は、コロナ禍が続く中であったが、2006 年に創設された哲学研究の全国ネットワーク「ハイデガー・フォーラム」が総力を結集して 2016 年から企画を始動させた『ハイデガー事典』が、2021 年 6 月に昭和堂から刊行された。20 世紀最大の哲学者の全貌を一冊に凝縮した 600 頁超の哲学事典である。森は、編集委員会代表の秋富克哉氏とともに、編集委員会の中核メンバーとしてこの記念碑的事業を牽引した。

(6) 2015 年の『活動的生』邦訳刊行後の森のアーレント研究の中心課題は、『活動的生』に続くアーレントの代表作『革命論』を、ドイツ語版から日本語に翻訳することであった。それとともに、アーレント『革命論』にもとづく「革命と憲法の哲学」を展開すべく着々と準備を進めてきた。その助走として、2021 年 12 月には、論文「コロナ禍から見えてきたこと――革命論序説」を、雑誌『ひらく⑥』に載せた。また、2021 年 10 月の東北哲学会では、「政治哲学の根本問題――アーレントから出発して」と題する大会シンポジウムのコーディネーターを務め、「革命とは何だろうか――アーレントと政治哲学の問題」と題して講演した。

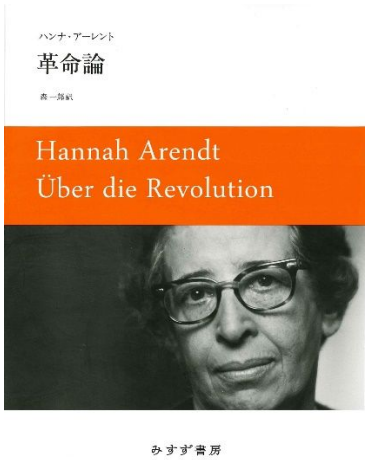
(7) 本研究の最終年度である 2022 年度に、森は、ハンナ・アーレントの第二の政治哲学的主著『革命論』を、ドイツ語版から初めて日本語に訳して、2022 年 4 月、みすず書房から刊行した。また、この訳書を全体にわたって解説し、入念に解釈した単著『アーレントと革命の哲学 『革命論』を読む』を、2022 年 12 月に、みすず書房から刊行した。この二書を刊行できた 2022 年度は、本研究の締めくくりにふさわしい実り豊かな一年であった。

(8) さらに、アーレント『革命論』の読み筋を示した論文「革命とは何だろうか――アーレントと政治哲学の問題」を、東北哲学会編『東北哲学会年報』第 38 号、2022 年 5 月、に掲載した。『革命論』刊行を記念して企画された佐伯啓思との対談「戦闘的思想家による「革命」志向の書 ハンナ・アーレント著『革命論』（みすず書房）新訳刊行を機に」は、『週刊読書人』2022 年 6 月 17 日付、第 3444 号の第 1〜3 面に掲載された。

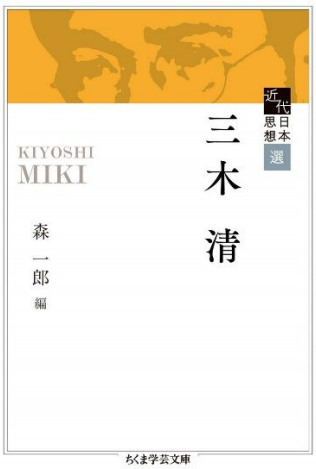
(9) 2021 年 3 月に刊行した『近代日本思想選 三木清』刊行の反響として、2022 年 6 月には、兵庫県たつの市霞城館で開かれた三木清研究会に招かれ、公開講演「活動的哲学者の軌跡――『近代日本思想選 三木清』を読む」を行なった。2022 年 7 月には、東北大学日本学国際共同大学院第 5 回有識者特別講義「評議会制と革命精神――宮城県美術館現地存続運動から学んだこと」を、東北大学文学部で行なった。このように、アーレントにもとづく革命の哲学を提唱する森の政治哲学研究は、本研究最終年度をもって達成されたことになる。



『ポリスへの愛　アーレントと政治哲学の可能性』風行社、2020 年 11 月刊

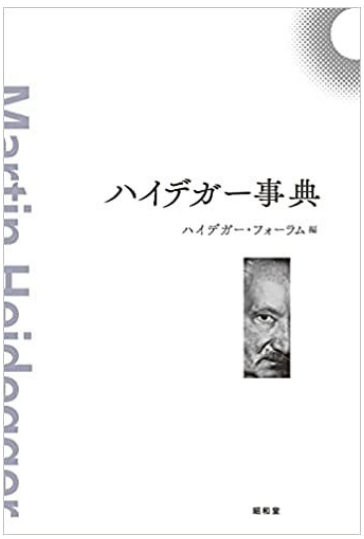


ハンナ・アーレント『革命論』みすず書房、2022 年 4 月刊



『近代日本思想選　三木清』ちくま学芸文庫、2021 年 3 月刊

『アーレントと革命の哲学　『革命論』を読む』みすず書房、2022 年 12 月刊



『ハイデガー事典』昭和堂、2021 年 6 月刊

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 森一郎	４．巻 60-2
２．論文標題 震災後の宮城、仙台にて日々是哲学する――つくることの時間性と、公共的歴史性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋学術研究	６．最初と最後の頁 169-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森一郎	４．巻 6
２．論文標題 コロナ禍において見えてきたこと――革命論序説	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ひらく	６．最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森一郎	４．巻 87
２．論文標題 〈応答して語る存在者〉のゆくえ――アーレントからハイデガーへ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	６．最初と最後の頁 238-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森一郎	４．巻 704
２．論文標題 死んだら終わりか？	５．発行年 2020年
３．雑誌名 理想	６．最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森一郎	4．巻 4
2．論文標題 コロナ禍はどこまで危機なのか――反時代的試論	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ひらく	6．最初と最後の頁 130-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森一郎	4．巻 705
2．論文標題 学問と生――ニーチェに学んで戦いを生きる	5．発行年 2021年
3．雑誌名 理想	6．最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森一郎	4．巻 38
2．論文標題 革命とは何だろうか――アーレントと政治哲学の問題	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東北哲学会年報	6．最初と最後の頁 47-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 森一郎
2．発表標題 革命とは何だろうか――アーレントと政治哲学の問題
3．学会等名 東北哲学会第70回大会シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 森一郎
２．発表標題 核時代に救いはあるのか？
３．学会等名 ハイデガー研究会特別企画「ハイデガーと現代技術の問題」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森一郎
２．発表標題 活動的哲学者の軌跡――『近代日本思想選 三木清』を読む」
３．学会等名 三木清研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 森一郎
２．発表標題 評議会制と革命精神――宮城県美術館現地存続運動から学んだこと
３．学会等名 東北大学日本学国際共同大学院第5回有識者特別講義（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計8件

１．著者名 ハイデガー・フォーラム	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 640
３．書名 ハイデガー事典	

１．著者名 TMIBを愛する会	４．発行年 2022年
２．出版社 建築ジャーナル	５．総ページ数 239
３．書名 えっ！　ホントに壊す!?　東京海上ビルディング	

１．著者名 宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク	４．発行年 2021年
２．出版社 宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク（自費出版）	５．総ページ数 272
３．書名 みんなでまもった美術館　宮城県美術館の現地存続運動全記録	

１．著者名 森一郎	４．発行年 2020年
２．出版社 風行社	５．総ページ数 330
３．書名 ポリスへの愛――アーレントと政治哲学の可能性	

１．著者名 日本アーレント研究会	４．発行年 2020年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 396
３．書名 アーレント読本	

1．著者名 三木清著、森一郎編	4．発行年 2021年
2．出版社 筑摩書房（ちくま学芸文庫）	5．総ページ数 615
3．書名 近代日本思想選　三木清	

1．著者名 ハンナ・アーレント、森一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 みすず書房	5．総ページ数 488
3．書名 革命論	

1．著者名 森一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 みすず書房	5．総ページ数 320
3．書名 アーレントと革命の哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関